

春の叙勲 島内受章者喜びの声

「地域のために」と一心

旭日双光章
(元洲本市議会議長)

正慶さん(73)



道路が狭い農村部。住民の高齢化も進む一方だった。「せめて救急車が入れるような広さの道に」との思いから市議を志した。1992年に初当選した。忘れられないのは1期目、阪神・淡路大震災の年のことだ。集落の中心を走る道の幅が狭く、住民が不便を強いられていた。震災を機に防災意識が高まり、大幅な道路沿いの住民に直談判。時に厳しい言葉を浴びながら交渉を重ね、住民が土地を提供する形で幅にこぎ着けた。「とにかく地域のために、との一心だった」と振り返る。以来、6期21年にわたって市議を務め、議長も2度経験した。議員を退いた今は農業の傍ら、仲間とともに地域内で農作業を請け負うほか、遊休地を活用した牧草づくりに力を注ぐ。今回の受章に「住民の支えのおかげ。感無量です」と笑顔を見せた。

「自分一人の功績ではない。みんなの頑張りが認められたということ」と受章の弁。1975年、地域の先輩に誘われ22歳で洲本市消防団に入団。仕事の傍ら、火事など緊急の呼び出しに危険な現場を昼夜かけずり回った。2004年、台風23号で洲本川が氾濫した際は、浸水が進む民家から寝たきりの高齢者を救出。自身が逃げるときには、水位は首の高さを超えていた。死の恐怖も体験したが「この地に生まれ育った者として、できることはしたい」と仕事を続け、12年に団長に。女性消防団を創設し、火事など被害の予防啓発活動と呼び掛けるなど、消防団の新たな取り組みにも力を注いだ。40年以上地域に尽くし、16年3月に退団。本業は重機のオペレーターで、今も現役で汗を流している。

(渡辺裕司)

昼夜問わず現場を奔走

瑞宝双光章
(元洲本市消防団団長)

小川 宏行さん(64)



「自分一人の功績ではない。みんなの頑張りが認められたということ」と受章の弁。1975年、地域の先輩に誘われ22歳で洲本市消防団に入団。仕事の傍ら、火事など緊急の呼び出しに危険な現場を昼夜かけずり回った。2004年、台風23号で洲本川が氾濫した際は、浸水が進む民家から寝たきりの高齢者を救出。自身が逃げるときには、水位は首の高さを超えていた。死の恐怖も体験したが「この地に生まれ育った者として、できることはしたい」と仕事を続け、12年に団長に。女性消防団を創設し、火事など被害の予防啓発活動と呼び掛けるなど、消防団の新たな取り組みにも力を注いだ。40年以上地域に尽くし、16年3月に退団。本業は重機のオペレーターで、今も現役で汗を流している。

(西井由比子)

慈しみの心を伝え38年

瑞宝双光章
(元公立小学校校長)

中田 光子さん(74)



「自分のできる限り、ひとたすら慈直に歩んできた。常に人に恵まれ、支えられてきたおかげ」と穏やかな笑みを浮かべ感謝している。淡路島の小中学校などで勤務して38年間、「自分の力で強く、生き抜いて」との思いで教え子に接し、三原志知小学校長時代は季節や自然を題材に講話した。最後に校長に就いた市小中学校で児童が読む絵本を自作した。震災で亡くなった

(佐藤健介)

麺一筋もうけより品質

旭日単光章
(前厚生連協同組合理事長)

出雲 勉さん(70)



2012年春の黄綬褒章に次ぐ栄誉。「思いも掛けないことで驚いている」。25歳の時、妻の祖父が経営する「淡路麺業」に入社。39歳で社長を任された。信念は「もうけより品質」。大手スーパーの進出による流通の変化などで地域に逆風が吹いても、「安売りはせん。良いものを作ればお客さんはついてくる」と麺一筋に打ち込んだ。45歳で開業したうどん店では、淡路産タマネギを丸ごと使う「玉ねぎつけ麺」が人気を呼んだ。暑気低迷などで製麺業界が縮小した9年前、次男に経営を譲ったが、新商品の「生パスタ」が全国的にヒット。13年には厚生連協同組合理事長の職に就き、同業者のまとめ役として奔走した。「5年前の褒賞は仕事で評価を得た『感動』が強かった。今回は会社を支えてきたみんなへの『感謝』かな」と笑う。(内田世紀)

(内田世紀)

不明者捜索などに尽力

瑞宝単光章
(元淡路市消防団団長)

森 幸好さん(67)



「気心の知れた漁師仲間が大勢いたから、抵抗なく入れた」。29歳のとき、欠員補充で勧誘を受け、旧淡路町消防団森分団に入団。その後34年間、消火活動や行方不明者の捜索などに尽力した。「火事も結構あったが、やはり阪神・淡路大震災を強烈に覚えている」。地区では多くの家屋が被害に遭った。自宅も半壊したが、高齢者の安全確保などに奔走した。淡路市消防団副団長に就任した2011年には東日本大震災が発生。津波の恐ろしさを目の当たりにした。地元は海のすぐそばと避難訓練などの啓発活動に取り組んだ。台風の多い年には総合事務所に泊まり込み、何日も家を空けた。「食事の約束や旅行をキャンセルしたこともあった。それでも理解してくれた家族や、団員たちの支えがあったからこそ受章」と感謝する。(内田世紀)

(内田世紀)

人との触れ合い大切に

瑞宝単光章
(元国勢調査員)

武田 文雄さん(79)



洲本市職員として勤務していた昭和30年代、国勢調査員。以来50年以上、地元・由良地区の調査に携わってきた。インターネットでも回答できる時代だが、「人とのつながりや触れ合いを大切にしたい」と調査票は住民から直接受け取る。回収率はもちろん100%だ。半世紀にわたる活動の裏側にあるのは、健康維持のための地道な積み重ね。毎

(長江優咲)

入所者の支援 四半世紀

瑞宝単光章
(養護老人ホーム介護職員)

矢野 さち子さん(70)



「体力勝負だし、きついこともある。それでも、この仕事は生きがい」ときつもの仕事を続ける矢野さん。1991年、44歳で地元・洲本市由良の養護老人ホーム「由良荘」の介護職員になった。以来、四半世紀を超えて介護の仕事に携わっている。きっかけは87年、40歳のとき。同ホームの調理員として勤務を始めたところ、当時の「寮母さん」が入所者から慕われ、「ありがた」と笑顔を見ながら、介護の道に進むことを決めたという。

(西井由比子)

義父に感謝 会話を重視

旭日双光章
(原医業吉田書協賛会長)

堀内 清さん(71)



消費者宅に業を置いてもらい、使った分だけ請求する「置き業」の店を経営する一方、業界団体の会長を務める。養父市出身で、電器販売店勤務などを経て、洲本市の配置販売店の養子になった。先代の仕事について回った。5年かけてノウハウを「から学んだ。信用を無くすのは騙で、顧客とのコミュニケーションが第一。大切なことはすべて教わ

(渡辺裕司)

「自分のできる限り、ひとたすら慈直に歩んできた。常に人に恵まれ、支えられてきたおかげ」と穏やかな笑みを浮かべ感謝している。淡路島の小中学校などで勤務して38年間、「自分の力で強く、生き抜いて」との思いで教え子に接し、三原志知小学校長時代は季節や自然を題材に講話した。最後に校長に就いた市小中学校で児童が読む絵本を自作した。震災で亡くなった

父の遺訓「ひきょうなことはするな」を胸に避難所でお年寄りを介助する子でも、手足が不自由だが、わずかに動く足指で画家になった障害者。命のたくましさや慈しみの心を伝えた。現在は授業のサポートや、下校見守りなどのボランティアに取り組み。「今も子どもとつながれることが喜び。物事が初めてできて、うれしくなる姿を見て、いまなきしいつまでも先生だ。(佐藤健介)